

## <研究ノート>

# 「核家族化と子ども中心主義」再考

—— 30人の家族史の事例から ——

ライカイ・ジョンボル

### はじめに

産業革命以来、人口増加や都市化現象の進展によって、伝統的な社会規範は著しい変化を遂げてきた。それは政治、経済的制度のみならず、生活条件、生活観、社会規範の刷新をもたらした。そのなかでも、大きく変化したと言われてきたのが、家族に関する社会規範であった。世代の再生産、子供の社会化、性的役割と規範の安定化といったさまざまな社会機能を持つ家族は、人間社会におけるもっとも基本的で重要な社会制度であるので、その変化と変動は、多くの社会学者の関心を惹きつけてきた。

もちろんそうした変化に注目する見方とは反対に、普遍で変わらない側面を重視する見方も成立した。たとえば、青井和夫は、「家族は社会制度のうちでもっとも変わりにくいものの一つであるから、社会の大変革がなければなかなか変わるものではない」[1987、36頁]と述べ、家族規範が自ら変化する力の弱いことを指摘する。しかし、近・現代化による社会システムのドラスティックな変化のもとで、伝統的な家族規範がそれに対応しておおいに変わってきたことについては、多くの実証的研究がある。

伝統的な家族規範から近代家族規範への変化は、一言で「家族の近代化」と呼ばれるが、近代家族の特徴は、家族研究者によって大きく異なるのも事実である。ただし、こうした研究者のなかでの最大公約数的な近代家族理解を指摘することも可能である。たとえば、近代家族論の代表者と言えるアリエス、フランドラン、ストーン、デルゲル、ハレブンやショーターは、近代家族の特徴を次のように記述した： 核家族化、少子化、家族機能の縮小、家族の内向化による家内領域と公共領域の分離、夫婦・親子関係の情緒的絆の近代化（つまり家族の親密性と凝集力の増加、子供中心化、家族生活の私秘化）等である。欧米の社会史家ショーターのように、近代家族の特徴として、ロマンス革命、母子の情緒的

絆、世帯の自律性というように狭く限定して考える立場もあるが [1987]、落合恵美子の  
ように、より包括的に把握する見方のほうが一般的となってきた [1996, 26頁]。

しかし近代家族をめぐる議論をするさいに、注意しておかなければならないのは、こ  
うして列挙される特徴は、基本的に、西ヨーロッパ社会における内発的近代化の過程で出現  
した家族の歴史的編制の特徴だということである。たしかにイギリスで18世紀末期から19  
世紀初期にかけておきた経済上の大きな変革に続いて、ベルギー、フランス、ドイツ、さ  
らにアメリカでも19世紀を通じてほぼ同様な変革と、それによる近代化が行われてきた。  
近代家族像は、この歴史過程で生成されたものなのだ。これに対して、日本における近代  
化は、江戸後期からの産業発展による内的自律的な発展という側面と同時に、むしろ欧米  
の外圧によって促進され、国民国家の建設過程で直接的に移入されたという点が特徴的で  
ある。

こうした近代化の特質、つまり伝統的社会における自律的近代化のベクトルと、他律的  
で強制的な近代化のベクトルの拮抗と融合という特徴は、家族規範の変容という領域にお  
いてはより顕著に表出される。とはいえ、大正期の都市中産階級の家族は、たしかに、欧  
米の家族研究者による近代家族の特徴を呈していた家族形態をとってはいたものの、内部  
の意識や理念は、まったく欧米型近代家族のコピーではなかった。

第二次大戦後、近代家族の価値観（民主化、平等化）はGHQの権力を背景にして浸透  
し、1950年代から70年代までのわずか20年間の中に一挙に日本社会を席卷したかにみえる。  
この変化の内実と、欧米型近代家族の理念とのずれを検証したいというのが、本研究の目  
的である。

## 1 核家族と家族構成の近代化

### 1-1 核家族化に関する実態と理念

核家族の実態と理念のズレを研究対象とした原田尚と青井和夫は、戦後日本社会におけ  
る家族の近代化を、家族成員の情緒、家族と外部システムとの関係という視点からだけで  
はなく、家族構成の変化という視角から実証的な研究をおこなってきた。

たとえば原田は、「核家族化という用語は定着するまでにいたっていないが、特定の拡  
大家族がしだいに分解して核家族（マードックのいう夫婦と子供からなる家族）を形成す  
る過程とみる見解、広くその形態的变化の一般的傾向とみる操作主義的な立場、制度の変  
化とみる見解がある」 [1987, 21頁] と述べ、核家族化についての二つのパターンを指摘

した。第一のパターンは、家族成員数の単なる統計的変化の様相における変化である。もう一つは、統計的変化のみならず、拡大家族の崩壊傾向と核家族至上主義的イデオロギーの出現という、意識と価値に関する変化である。換言すれば、前者の場合、核家族化を単に構成比のレベルの変化としたのに対して、後者の場合はそれだけではなく、家族形態の理念の変化を対象化しようとしているのである。そして、原田は前者を「擬制的核家族化」と呼ぶ。つまり表層に現象する家族の変化である。そのことをもう少し説明しておこう。

昭和35年から50年までに至る高度経済成長期に相当する15年間の家族動向を研究対象とした原田は、その15年間で核家族世帯数の親族世帯総数に占める割合が63.5%から74.3%へと変わった一方で、拡大家族世帯数がほとんど変わらずに、しかも少し増えてきたと述べる。その理由は、単に当時の就学人口の地域移動や単身赴任がもたらした他出世帯の急増にしたがい、家族世帯総数が増加したことにある。そのため、「拡大家族崩壊の進んでいないことを裏面から証明」[1987、25頁]できる、と原田は考えた。

また、理念型に関しても、多くの意識調査によって、同居希望が極めて強く、他出世帯の中では将来再び親と同居したいと考える者が多数を占め、老いた両親との同居意識が根強く維持されているということがわかった。原田はこうして、高度経済成長期における核家族化が、単なる擬制的核家族化にはかならないことを強調したのである。

これに対して青井和夫は、「家族構成の変化（核家族化）がただちに家族観の変化（夫婦家族化）をあらわすものではない」[1987、41頁]と指摘した。これは、原田とほぼ同じ視点から家族を捉えたものだ。青井は、資本主義的生産様式の出現によって直系家族の代わりにしだいに核家族が形態としては、支配的になったように見えるが、戦前の日本では直系家族がなかなか崩壊しなかったことに青井は注目する。それで彼は、明治時代の儒教的家族制度などのイデオロギーが支配的だったゆえに、日本における核家族化は、擬制的核家族化という形態をとらざるをえなかったと考えている。しかし、高度経済成長期である昭和40年代に入ると、すでに変化の兆しが出現したという青井の見解は原田の先述の立場と少し異なる。青井は、昭和40年代ではマイホーム主義に賛成する者の割合がかなり多かったが、それを実現する条件が不十分であったために核家族化の進展が阻害されたという。また、農家の主婦の家族観が、都市部の女性の核家族志向とは変化してきたと述べる。

原田も青井も核家族化のあり方を主にイデオロギーの方面から把握することに力点を置いたために、「擬制的核家族化」の概念を導入したのだが、現実分析の領域においては、差異・対立が生じてきたように思われる。

核家族化が近代家族の特徴であるという見解に対して、異議を申し立てた研究者は、理

念型ではなく、実態（構成比）の観点から家族を検討した。周知のように、ラスレットはイングランドの家族が近代以前から1960年代にいたるまで不変であったと主張する。また、台湾の家族社会学者Chun-kit Joseph Wongは、「拡大家族は中国において理念型であったものの、現実には、伝統社会において大多数は核家族の形態をとっていた」[1981、71頁]と、理念と現実のギャップを明確に示した。近代化の過程で、拡大家族から核家族への移行は、じつは、実態のレベルではなく、理念のレベルで顕著に進行してきたことがわかる。さらに、「日本の前近代においても核家族形態はかなり普遍的だった」[1996、58頁]という牟田和恵の指摘も、同じく実態のレベルから核家族化の言説に対して疑問を投げかけているものだ。

しかし、核家族が過去から一貫して普遍的に存在していたといっても、当時の平均寿命が現在よりかなり短かったという事実をも考えるべきだろう。拡大家族を意識の上で選好したとしても、早期の死亡によって拡大家族の形成が難しかったことも事実である。前近代の中国家族を研究したHarry Johnsonは、「複婚制度のような拡大家族は中国において、けっしてもっとも一般的な形態ではなかった。それは、エリート層にとってのみ一般的であり、唯一資力のある地主階層だけが複婚を実践する余裕があった」[1968、157頁]。換言すれば、拡大家族の形成は財産のない人にとってはきわめて難しかったからこそ、核家族の形成の方が多かったのである。

## 1-2 近代家族と核家族

先ほど述べたことより、次のことを指摘したい。つまり、家族構成の変化の点から家族の近代化を論じてきた諸研究の論点は、家族構成の減少をもって核家族化として承認できるのか、さらには多様な事情で出現した核家族化をもって近代家族の特徴として認めるのか、ということである。この点を考察するために、近代家族の研究者は実態のレベルにおいても、理念のレベルにおいても、詳細な分析をおこなってきた。

家族構成の視点と同様に、アリエス、ポロクらの論争に見られたような、家族成員間の情緒関係をめぐる論点も重要だ。つまり家族成員の情緒的絆は近代化にともなって強くなっているのか、さらにはそれが近代家族の特徴なのか、ということである。

これら二つの視点はともに重要であり、それぞれについての研究も行われてきたが、これらの視点相互の関係自体はほとんど研究対象とされずに、むしろ別々に検討されてきたのが実状である。そのなかの例外が森岡清美の研究である[1987 190]。戦後の日本において夫婦家族制の理念を小家族化の要因の一つとして考えている森岡は、情緒関係と家族規

模の変化を結びつけて家族の変容を考察してきた。森岡の研究によって、親子中心から夫婦中心へと変化する情緒関係は小家族化を促すことが明らかになっている。

しかし私が2001年に京都市で行った聞き取り調査の結果によって、家族構成と情緒関係の間には必ずしも、森岡が指摘するような関係が見られないことに気づいた。つまり、家族構成員の増大と情緒の強化が（反比例ではなく）比例する傾向が確認できたのである。本論では、原田と青井の研究と同様に、家族構成の近代化を理念のレベルで検討することを通して、その関係性について検討してみたい。

## 2 家族構成の理念型——30人の家族史の事例から

2001年に京都市で行った調査において、直系家族（3世代）から核家族（2世代）へと変化するプロセス、つまり核家族化がどのように現象（非現象）しているのかについて予備的な考察を行った。これはあくまでも全体的傾向を予測し本調査を実施するためのパイロット調査的性格をもったものであり、その結果をそのまま一般化することは想定されていない。

家族構成の類型が核家族と直系家族のみに限らないというのは言うまでもないが、速水融によれば日本の歴史上では近世初期にまだ存在していた複合家族は17世紀の末頃までに直系家族へと移行したという〔1997、143-54頁〕。そこで非核家族形態の代表として、本論では暫定的に直系家族を選び、両者の対比によって考察をすすめていくことにした。

本調査では、調査対象者の条件について三つのことを考えた。一つは、京都市の住民票を持っていることである。そこで京都の地域性を強調したいと考えた。二つ目は、対象者の年齢である。それによって、30人を20-30代、40-50代、60代の3つの世代集団に分けて、各集団には10人が入っているようにした。それで、年齢による同数を保証したかった。もう一つは、対象者の性別である。つまり、30人の中で世代ごとに男女が同数になるようにした。それによって、30人の京都市民を対象とし、世代・性別により等しい割合を得るために、5人ごとに6つのグループに分けた。これらは代表性をもった標本抽出ではなく、知人及びその紹介者のなかから選んだものであり、あくまでも予備的性格であることを再度確認しておきたい。

調査対象者の答えから、核家族か直系家族のどちらの形態を選好するのか、及びその理由を質問し、得られた回答を分類して、世代ごとに意識を比較し、核家族化に対する生き方を整理してみた。その概略を以下で見よう。

## 2—1 高齢者グループの選好する形態

高齢グループ（60代以上）の理想とする家族形態としては、直系大家族をあげる回答者が多いのではと予測したが、現実には、核家族を選好する人が多かった。理由としては、プライバシーの確保、時間の自由、精神的気楽さなどといった表現で説明されるが、こうした説明が男性によって強くなされる傾向があった。

たとえば、

**Aさん（男）（67歳）：**

「僕の親の家族では3世代が一緒に住んでいたけど、僕は昔も今も親と子供からなる小さい家族の方がいいと思う。なぜなら昔は家が小さくてプライバシーがなかったから。」

**Cさん（男）（66歳）：**

「僕は親と一緒に住まずに妻と子供だけの小さい家族が欲しかった。今までずっと大家族に住んでいて、自分の時間があまりなかったから。」

**Bさん（男）（66歳）：**

「僕はずっと核家族に住んでいた。まあ、3世代の大家族を考えれば、やっぱり2世代の家族の方がいいと思う。小さい家族の方が気楽じゃない？」

といった口述が典型的なものだ。これに対して同じ年齢グループでも、女性の反応は少し異なっていた。直系大家族と核家族の双方の利点を評価しながら語る回答が少なくなかったのである。彼女たちは、子どもに社会性をもたらす直系家族の利点と世話の負担というマイナス点のあいだで躊躇している。その例を、以下の二例にみることができる。

**Eさん（女）（65歳）：**

「昔は大家族も核家族もいいと思ったけど、今は、子供の社会化のためにやっぱり大家族の方がいいと思う。それで、大事なことのためにみんな少しずつ譲り合うことができるようになると思う。」

**Aさん（女）（69歳）：**

「私の母がよく祖母の世話をしていたのを見ていると、私はそれをかわいそうだと思った。だから結婚前、私の母みたいに苦しみたくないと思ったので、核家族の方がいいと考えた。今は、大家族でもいいと思う、なぜなら祖父母の世話をすることは子供に対していい躰になるから。だけど、やっぱり親に対してかわいそうじゃない。だから核家族の方が楽だと思う。」

60代の10人の中では、男性も女性も基本的に核家族の方を選好している。その現象は家族近代化論が述べている核家族化に完全に一致しているが、その理由の中身はじつは、多様であることがわかる。また、男性のDさん、それと女性のA、Eさんは子供のジェネレーション・ギャップの理解、子供の社会化、躰のために大家族の方が理想であると答えているが、こうした語りには、子供中心化と核家族化の間には逆相関の関係があることを示唆している。

## 2-2 壮年グループが選好する家族形態

つぎに戦中から戦後すぐに生まれた壮年世代の傾向をみてみよう。まず男性の選好する家族の語りで特徴的なのは、核家族化と直系大家族化のあいだで揺れ動き折衷的な態度をとる傾向である。そのうえで5人中4人が、直系大家族を理想の形態としてあげていることは、高齢グループとは対照的である。そのことは、以下にみるFさん、Gさんの語りによくあらわれている。

**Fさん（男）（58歳）：**

「僕の実家は大家族だったから、結婚した時、それの方がいいと思った。なぜなら、人が少ない場合はさびしくなると考えたから。しかし今は、核家族の方が楽だと思う。僕は息子の家族と一緒に住みたくない。今ほど自由に、ノンビリできないから。」

**Gさん（男）（57歳）：**

「大家族も、核家族も経験している僕は、子供が新しい見智、知恵、経験を得るために3世代の方がいいと思う。しかし、大家族にはもちろん悪いところもあると思う、例えば祖父母が親を邪魔すること。」

**Hさん（男）（52歳）：**

「僕は3世代の家族がいいと思う。それは自然なことで、助け合いやすいし、必要な時に一緒に集まりやすいし、年上の人々の経験は子供のために役に立つと思う。」

直系大家族を選好する壮年男性に対して、壮年女性は、プライバシーや独立食文化、気楽さなどをあげて、核家族を選好する語りも少なくはなかったものの、高齢者グループに比べると、直系大家族支持派が目立つのが特徴である。以下で、女性の語りのダイジェストをみてみよう。

**Fさん（女）（58歳）：**

「結婚前は、日本の家は小さくて大家族にとっては住みにくいと思った。今もそう思う。それと、子供の立場から考えればプライバシーのためにも核家族の方がいいと思う。」

**Hさん（女）（48歳）：**

「私は大家族の経験がないけど、やっぱり核家族の方が暮らしやすいと思う。それで祖父母からも自由になれる。日本の家は大家族に向いていないから、建物の問題がある。食べ物においても、祖父母と子供は違う料理が好きなので、毎日2つのメニューを作ることが大変じゃないかな。」

**Jさん（女）（42歳）：**

「絶対大家族の方が理想だと思う。その理由を考えれば、私の小さい時の経験もとてもよかったし、子供の社会化のためにもいい。子供はそれで色々なジェネレーションのことがわかるから。また、祖父母が家事に参加すれば私の負担が少し減ると思う。」

40、50代の10人の中で、3世代の直系家族（対象者の述べている大家族）を選好する人は60代の対象者より驚くほど多い。核家族を理想とする人はFさん夫婦、それと女性のHさんのみになる。さらに、男性のG、I、Jさん、それと女性のIさんは子供と親の立場を分けて考える視点を共有している。

### 2-3 青年グループの選好する家族形態

最後に20代・30代の青年グループの家族形態に関する意識をみておこう。ここでも基本的には、核家族形態を選好する回答が圧倒的多数だった。3世代家族同居という経験がないために、自分が生まれ落ち育った核家族をあげる回答が目立つ。直系大家族の長所としてあげられる「小社会としての家族」や異世代間の相互扶助などといったイメージはほとんど共有されない。均質で平板な核家族イメージへの包摂がみてとれる。その語り口としては、以下のようなものが典型的だった。

**Kさん（男）（31歳）：**

「大家族の経験がないけど、やっぱり核家族の方がいい。大家族ではけんかすることが多いかもしれない。」

**Oさん（男）（23歳）：**

「大家族の経験もないし、やってみたくもないから、やっぱり核家族の方が楽だと思う。」



Lさん（女）（32歳）：

「私は今までずっと親と兄の4人で住んでいたの、大家族の経験がない。結婚したら、私も核家族の方が良いと思う。」

Oさん（女）（25歳）：

「私は親と姉と一緒に住んでいる。大家族の経験がない。今の方がいいと思うから将来も核家族に住みたい。」

20—30代の対象者の中で、7人の理想像は核家族に向いている。その中で、6人の理想像は主に大家族の経験がないことに由来する。1人の場合は、自分の経験の有無と関係なく、母からの直接的な影響による。3世代家族を理想とする人は3人いるが、理由は異なっていた。1人は、自分の経験があり、その経験が評価に転じた。もう1人は親の介護のために3世代家族を理想としている。というように大家族を選好する根拠も多様で平板なものだった。

### 3 考 察

老壮青3グループの男女別に、選好する家族形態を尋ねて、その理由をまとめてみたのが表1から4である。30事例に限ってみると2世代核家族を選好する人が多数派を占めた。この結果について、以下の四点にしぼって考察してみたい。

まず第一の点は、家族形態を選好するさいに作用する力として、身体化した家族規範の発動や理性的理解による選択ではなく、その家族形態を経験したかどうかという個人的体験がきわめて重要な要素としてあることだ。このことは、理想とする家族は、社会規範として流通し再生産されている意識に直接影響を受けるのではなく、個人的経験の実感的評価による部分が少なくないことの証明である。

なお上述の表をみると、2世代家族を理想とする理由として、「3世代直系家族の経験がないから」と答えた人が多いことがわかる。つまり、ある種の家族生活の経験がないことが、その形態を理念型として選択させなくしているのである。また、3世代家族の経験をもっているが、その家族生活の経験が否定的だったために、2世代核家族の方がいいと考えている対象者は「私の母みたいに苦しみたくない」という女性のAさんと、「夫の母の世話することが大変だった」を語る女性のCさんのみである。その一方で、3世代家族生活に不満な経験をもって、その形態を否定する男性が1人もいないことは注目に値する。総体的に言えば、核家族が選好されるのは、実際の家族生活の個人的経験によるものだと

指摘できる。

第二の考察点は、核家族が選好される傾向が強いなかで、夫婦関係の強化・特化をその理由にあげて語る回答者が皆無であったという点である。この点については、近代西欧に出自をもつ近代核家族の様態とは異質なものだ。プライバシーや自由についての語りはあるものの、それらはすべて個人レベルのものであり、夫婦関係についてのプライベート性や自由さではなかった。この自由やプライバシーについての意識は、そのまま祖父母との同居に関する否定的意識にむすびつく。

「祖父母の親に対する邪魔」のせいで2世代家族に賛成する理由も存在した。30事例の中でそれを述べる対象者は5人いた。家制度を崩壊させ核家族を社会の基礎とする新しい家族理念は、親子関係に基づく直系家族制の代わりに夫婦関係を重要視する夫婦家族制を強調しているのだが、30人の対象者が夫婦関係への重要性を驚くほど少ししか意識していなかった。

第三の考察点は、核家族と直系大家族の評価点に関わるものだ。表1と表3によれば、2世代核家族を選好するさいに重要だと考えられる要因としては、自分のための時間・空間・プライバシーを保障されるということと、日本の住居形態が3世代家族に向いていないという「住宅の不便」の二つがあげられる。いずれにしても、核家族を選好するさいに、夫婦関係の重要性を強調する観念とはズレがある。

また、「子供の立場から考えればプライバシーのためにも核家族の方がいい」と考える事例もあった（女性Fさん）。しかし、2世代核家族よりもむしろ3世代直系家族の方が、子どもにとっては好ましいという意識も生まれていることが、表2と表4からわかる。たとえば、「子供の社会化のために」、「ジェネレーション・ギャップを認識するために」、「祖父母の世話をすることは子供に対していい躰になるから」、「子供が新しい見智、智恵、経験を得るために」などの語りがその一例である。

最後の考察点として、家族間関係における「子供中心」と家族形態との関連が重要になる。家族内の人間関係を「自己中心」、「夫婦中心」、「親中心」、「子供中心」、「家族全体中心」と分類してみると、家族形態の選好過程にもっとも影響を与える関係性が、「子供中心」である。

家族の近代化を家族形態ではなく、家族成員の情緒関係から捉えたアリエスは家族の親密性の増加を指摘し、近代核家族の特徴として考えた。しかしそれに対しても異説がないわけではない。ポロクは、親から子供への愛情は、近代以前にも当然のごとく存在しており、親密性と情緒性の増加を近代家族だけの特徴とすることはできないと指摘し、アリエスらの近代＝親密性論を批判してきた。しかし、家族成員間の情緒関係の増加は多数の研

究者によって近代核家族の特徴の一つとして認められてきた。この考え方の延長上に、ハレブンのように、親の子供への関心の増加を意味する「子供中心化」も位置づけられ、近代家族の特徴となるという指摘がある。

しかしながら、本研究が予備的に明らかにしたように、子供中心的意識は、3世代直系家族の選好と矛盾するどころか、子供の社会化、見智や智恵の拡大、躰のために3世代からなる家族の方がいいと考える語りに頻繁に登場する。換言すれば、核家族化と子供中心化は同時に進展しているが、子供中心化自体は核家族化の過程に対して直接対応しているというよりも、むしろ親子関係を強調する3世代の直系家族の選好意識を促進しているのである。

表1 2世代家族を理想とする理由：男性の場合

////////////////////////////////////	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
2世代の経験に対し満足		●								●				●	●
3世代の経験がないため					●						●				●
祖父母が邪魔							●		●						
自分のために			●			●									
住宅の不便	●														

表2 3世代家族を理想とする理由：男性の場合

////////////////////////////////////	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
子供のために				●			●	●	●	●					
自分のために													●		
家族全員のために								●							
老親の介護のために												●			

表3 2世代家族を理想とする理由：女性の場合

////////////////////////////////////	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
2世代の経験に対し満足															●
3世代の経験がないため		●							●			●			●
3世代の経験に対し不満	●		●												
祖父母が邪魔	●			●				●							
自分のために									●				●		
住宅の不便						●		●							
子供のために						●									
親の影響で														●	

表4 3世代家族を理想とする理由：女性の場合

////////////////////////////////////	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
子供のために	●				●		●		●	●					
親として自分のために										●					
家族全員のために					●										
3世代の経験に対し満足										●					
3世代の経験がないのに											●				

## おわりに

この予備的調査の結果から、最後に三つのことを指摘しておきたい。

第一は、家族の近代化によって夫婦関係が理念的に強調されてくることは否定できないが、核家族に対する選好意識の形成の中ではそれがもっとも支配的な要因とは言えないことである。選好意識形成の内実はきわめて個人的であり多様性を内包しているのである。したがって、家族の近代化をより深く理解するためには、個人の生活観を家族形態だけではなく、情緒関係や家族と外部システムとの関係などの研究と総合させる必要がある。

二つ目は、本調査の資料によって指摘したように、核家族化の進展と子供中心化展開の逆相関を考えるなら、近代家族の特徴自体を別々に検討することのみならず、すでに指摘されてきた諸特徴の間の関係をも同様に研究する必要があることである。

最後に、この予備的調査で明らかになった傾向が、日本社会においてのみ見られる現象であるのかどうかを確定するために、他地域他文化との比較研究が必要となってくる。それが可能になれば、家族の近代化についての国際比較に重要な貢献が約束されるだろう。

## 引用文献

- 青井和夫、1987、「家族観の変容」、望月嵩ほか編『日本社会学4：現代家族』東京大学出版会  
 落合恵美子、1996、「近代家族をめぐる言説」、井上俊ほか編『現代社会学19：＜家族＞の社会学』岩波書店  
 E. ショーター、1987、「近代家族の形成』昭和堂  
 原田尚、1987、「家族形態の変動」、望月嵩ほか編『日本社会学4：現代家族』東京大学出版会  
 速水融、1997、『歴史人口学の世界』岩波書店  
 牟田和恵、1996、「日本型近代家族の成立と陥穽」、井上俊ほか編『現代社会学19：＜家族＞の社会学』岩波書店  
 森岡清美・望月嵩、1987、「新しい家族社会学』培風館  
 Johnson, Harry M., 1968: *Sociology: A Systematic Introduction*. London.  
 Wong, Chun-kit Joseph, 1981: *The Changing Chinese Family Pattern in Taiwan*. Southern Materials Center Inc.

(ライカイ ジョンボル・博士後期課程)

## **Reconsidering Nuclearization of the Family and Parental Love towards Children : From Thirty Family Case Studies**

Zsombor RAJKAI

Due to industrialization the values and norms of traditional families, regardless of cultures and societies, underwent sweeping changes bringing about new features of the family. These changes are generally called the modernization of the family. Numerous family researchers have made enormous efforts to describe the characteristic features of the modern family, efforts which have not been as simple as they may seem to be. These features have been examined from various aspects such as family structure (type and size), relationships between family members (internal aspects), as well as connections between family and society (external aspects). So far these features have mainly been studied separately, paying little attention to possible relations between them.

However, according to a survey of thirty people, carried out by the author in 2001 in Kyoto city, such relations are possible. Though the original aim of the survey was not to explore possible relations, it was found that there is a reversed relationship between nuclearization of the family and growing 'parental love' towards children in the ideal family pattern. That is to say, while the interviewees mainly preferred the two-generation nuclear family type for their own happiness, they chose the three-generation family type as an ideal model for socialization of their children. There is a contradiction here. If one admits both nuclearization and growing 'parental love' towards children undergoing simultaneously as features of the modern family, then it is surprising to see such a reversed relationship between them in the ideal family pattern. If the nuclear family type is a generally accepted ideal form, then it should refer to each of the family members. However, the interviewees regard it as an ideal merely for their own happiness, but not for the socialization of their children.

Though there is no full explanation for this phenomenon yet, it must be taken into account that the present survey was carried out in 2001, a time when the modern Japanese family had already been swinging since the late 1970's, slowly entering a post-modern period. Thus, one should reconsider the (possibly changing) meaning of 'parental love' in a changing society, while examining if the result of this survey merely refers to the Kyoto area, or if it is a much more general phenomenon.